

## 平成4年度橋本記念講演

### 図書館学の展開

長 澤 雅 男

*Masao Nagasawa*

#### はじめに

今回の講演の依頼を最初に受けたのは1年以上も前のことだったと思います。しかし、その折りにははっきりとお断りしました。第1に、橋本記念講演は私ごときが引き受けるのは僭越であること。第2に、健康上の不安があり、約束してもスケジュールに穴を空ける恐れがあったこと。以上の理由をあげて固辞しました。

それでいて、どうして今この場に立っているのか、自分でもその変節が恥ずかしく思われますので、若干弁明をさせていただきます。と申しますのは、その後、思い出話でよいからという再三の説得があり、これ以上断わると迷惑をかけると思い、かつ定年を控えた私を指名されたのは特別のご厚意によるものであろうと思い、僭越ながらお引受けした次第です。

したがって、今日は大変よい機会が与えられたことを感謝し、自分の思い出を中心に、図書館学科ならびに本学会の揺籃期すなわち本学会創立から10年後位までを回顧し、それを通してわが国の図書館学の展開の跡を振り返りたいと思います。したがって、内輪の話が多くなるかと思いますが、なにぶんご容赦を願います。

#### 第二次大戦後の図書館学

ところで、最近、図書館情報大学からPR用のパンフレットが発行されましたが、ご存じでしょうか。私も1冊いただきましたが、国立大学の刊行物としてはなかなかよく工夫され、見栄えのする編集になっています。その中で、私の目をとらえた一節があります。それは、“日本の図書館情報学は本学の歩みとともに発展してきた…”というくだりであります。図書館情報大学は

1979年10月に開学した大学ですから、今年で開設13年になります。その間、この大学とともに日本の図書館情報学が発展したのかどうかは評価の分かれるところで。しかし、少なくとも、その自負の気概には大いに見習うべきものがあります。

実は、私が慶應に専任教員として勤めたのも同じく13年間でしたから、その向こうを張ってというわけではありませんが、本日は〈日本の図書館学は慶應の図書館学科の歩みとともに発展した…〉という認識に立って、話を進めることをお許し願いたいと思います。

ここに〈図書館学〉といい、図書館・情報学といわないのは、そのように呼んでいたところを中心に回顧し、引き続き開かれるシンポジウムの前座の役目を果たさせていただければと考えてのことですが、もう一つ理由があります。

それは、40年ほど前に出版された『図書館学の展開』という本の書名を枕にして話題を進めようと思っているからです。と申しましても、今ではこの本をご存じの方は少ないと思います。これは当時、京都学芸大学の図書館事務長で図書館学の講師を兼ねておられた大佐三四五という方が丸善から出された本であります。

私は、この本が発行された当時、学生でした。偶然これを手にしたとき、全く未知の世界が照らし出されたような思いとともに、〈図書館〉に〈学〉がついている珍しい学問分野があるものだと感じたことを覚えています。

ながらくページを繰ることもなかった本だったので、最近、改めて読み返したくなりました。この内容は、著者の序文によれば、次のように書かれています。

“まず図書館学は外国において如何ようにして始まり、そして発展してきたか、その過程を究明し、次に現代各

国図書館学の組織内容を明らかにすることに努めた”とあります。この第1章は「図書館学とは何ぞや」、第2章は「近代図書館学の発足」、第3章は「ドイツ図書館学の発展」、第4章は「フランスの図書館学」などと、後続の各章も同じく、世界の各国ごとに図書館学教育事情、関係文献、教育機関などを紹介した便覧のような本です。第10章「日本の図書館学」では、歴史、文献、関連法規、基準等が載っています。「大学に於ける図書館学科目」という節の末尾あたりに、「慶應義塾大学内日本図書館学校」の項があり、簡単な設立経緯と教科内容一覧が載っています。

今日お話するのは、主としてこれに書かれている時期以降のことですが、前史として若干それ以前のことにも触れておきます。

この本では、戦前のわが国の図書館学についても述べられていますが、図書館学の研究が本格化したのはやはり第二次世界大戦後であるといつてよいでしょう。それ以前には正規の図書館員養成機関として、大正10年に創立された文部省図書館講習所があるのみで、これが研究の拠点になりうるはずはありません。

研究といえば、図書館の現場に身をおきながら、比較的時間に余裕のある図書館員が日常業務のかたわら続けていた研究しかありませんでした。そうした研究にはアメリカ図書館学の影響が色濃く反映し、図書分類法、目録法などの整理技術面の研究が多かったようです。戦前戦後を通じて、さらに今日に至るまでも、わが国では、このような実務的・技術的な研究が重視され、研究の主流を占めてきたといつてよいでしょう。

1950(昭和25)年、図書館法が成立し、それに基づく司書資格付与との関わりにおいて、ようやく図書館学関連科目が大学で講義されるようになりました。しかし、当初は実務経験のある現場の人たちのなかから、その教員を求めなければならず、実務の解説を主とする講義とその実習を行うもので、大学における研究に裏付けられた教育とは、程遠いものでありました。

こうした状況のもとで、1952年4月「日本図書館学会設立の趣旨」が発表されました。その中では次のように謳われています。すなわち、“堅実で効果的な図書館学研究の足場を築くため設既の図書館関係団体の持つ研究機能を結集して一本にし、大学その他の関係者と個人研究者をも加えて新たに学会を設立し、研究活動の相互援助と応分の助成の途を開くこと”の必要性が述べられています。その意気たるや壮なるものがあります。

翌1953(昭和28)年6月、この設立総会において、当時東京大学の教育学部長であった海後宗臣先生を初代会長に選出し、その後、日本図書館協会、国公立大学図書館協議会、私立大学図書館協会、全国学校図書館協議会、東京大学図書館学会、三田図書館学会、図書館職員養成所図書館学会、その他各地域の図書館関係の諸団体が母体となって役員を選出することになりました。かたちとしては当時の研究団体を結集して日本図書館学会が創設されたというようにみられますが、これらの団体の多くは、研修、親睦等を主目的としており、研究団体の名に値するものはほとんど含まれていなかったといつてよいでしょう。

このほかにも、1950年代には引続き、各種研究団体が設立され、それぞれに機関誌を創刊しています。しかし残念ながら、このような研究発表のメディアの量的拡大に比例して研究の質的充実が図られたわけではありません。

そうしたなかで、日本図書館学会の機関誌『図書館学会年報』では、創刊当初、華やかに図書館学理論に関わる多様な議論がたたかわされました。すなわち、〈図書館学とは何か〉、図書館を対象とする一つの科学が成立するのか、図書館〈学〉と呼ぶに値する体系を確立することができるのか、といった問題を扱った論文がいくつかが発表されたり、図書館現象への切込みを目指した研究的取り組みがなされたりもしました。さきほど紹介しました大佐さんの『図書館学の展開』もこうした時期に著された1冊といえるでしょう。しかし、この時期、必ずしも図書館学理論の基盤を固めるほどの成果が得られたとはいえ、ほどなく学会活動自体が沈滞期を迎えることになります。<sup>1)</sup>

1950年以前は、いずれの団体でも会員は数においても研究実績においても実務に従事している図書館員が優位を占め、大学に籍をおく研究者は少数派にすぎませんでした。当然ながら、研究者養成のための正規の大学院課程はなく、研究者になるための最善の方法はアメリカに留学することであったといつてよいでしょう。

そうしたこともあって、雑誌はアメリカ図書館学の紹介、個々の図書館における実践事例の紹介などで占められており、実質的な研究成果とみなすことのできるものはまれでした。

## 図書館学科の創設

一つの学問の研究が組織的に行われるためには、その

学問が大学に位置づけられなければならないといわれていますが、図書館学の場合、1950年代の状況を見ますと、慶應義塾大学、東洋大学、天理大学、同志社大学などで常設の講義が行われています。また、国立大学でも、東大、京大などの図書館学講座により、関係科目が開講されています。

とりわけ、1951年4月に大学の正規の学科としてわが国で最初に設けられた慶應大学の図書館学科が館界に与えた影響は大きかったといえます。これは次のような目的を掲げていました。すなわち、“図書館学を研究教授し、各種の図書館および調査機関等に専門教育を受けたライブラリアンを送るのみならず、現職者の教育にも力を注ぎ、かつ図書館学のセンターとしての役割を果たすという目的”が表明されています。つまり、図書館学科では、第一に、図書館員養成、第二に現職者の再教育が目指されています。図書館学のセンターとはいわれていますが、それは研究センターを意図していたものとはいえません。しかし、上述の二つの目的に関する限りは、小さな学科であるにもかかわらず、かなりの成果を挙げたのではないかと思います。

ところで、私は、この学科が設置されてから数年後のころですが、所用のために田舎から上京していました。その折、三田のキャンパス近くの知人の家に2、3日泊ってもらい、ある朝、散歩がてら、幻の門から慶應のキャンパスにのぼって見たことがあります。掲示板だったのでしょか。図書館学科が3年編入生の募集をしていることを知りました。

当時は、現在の図書館のある辺りに木造の建物があつた、その1階に図書館学科があり、その2階には慶應外語、地階には床屋、蕎麦屋、用務員室などがありました。そのころ南門や南校舎はなく草の生えた広場、大学院棟の位置には小さな研究室、この西校舎のある場所は戦災後の廃墟のまま、研究室棟の位置には古い低層の木造校舎が建っていました。そんなキャンパスですから、尋ね歩かなくても図書館学科には容易に行き当たりました。

若干興味があつたので、なんとなく事務室の前をうろついていたところ、大柄の外国人に見とがめられました。そして、何といわれているのか分からないまま、事務室に通されていました。そのころ私は、英語はほとんど理解できませんでしたが、通訳を介して学科の説明を聞いたように思います。その外国人が当時の学科主任のギトラー先生であつたことは後になってから分かつた

ことです。

どんないきさつで入学することになったのか、今では思い出せませんが、わけもわからず、入学手続きをしてしまったような気がします。その結果、あまりにも軽率な進路決定をしたことから、私の将来を考えてくださっていた恩師から絶交を申しわたされ、ショックを受けたことが今更ながら思い出されます。

後年、しばしば〈どうして図書館学をやるようになったのか〉と学生などから尋ねられることがありますが、その度に、恥ずかしながら、なんとなく成行きで、こうなつたとしかいいようがない節操のなさを披露するほどの悪さを感じます。

しかし、強いてこじつけるならば、『図書館学の展開』という本との出会いがあつたからではないかこのごろ思うようになりました。学科に入るための面接の際に、志望の動機を尋ねられ、苦し紛れに『図書館学の展開』を読んで興味をもつたから…”ともっともらしい理由を述べ、冷汗を流したことをよく覚えているからです。そんなことがあつたから、逆に『図書館学の展開』が記憶に残っているかもしれません。

ともあれ、1956(昭和31)年4月、自分でも予想だにしなかつた慶應の図書館学科3年に編入学しました。

その年の5月、神奈川県立図書館を会場に全国図書館大会が開かれていました。その全体会議にクラスの仲間たちとともに引率され出席したことがあります。図書館の仕事をしている人の集まりということなので、どんな人たちだろうかと興味を抱いていったように覚えています。

そのときの雰囲気といいますか、図書館界の人々についての印象を今でも思い出すことができます。全体会議に提案事項がつぎつぎ報告され、質疑応答が加えられるという経過で議事が進行していましたが、たまたま会場のフロアからギトラー先生が立ち上がり、何か発言されました。通訳が入りました。

そのとき、「アメリカ人帰れ」といった種類の野次が飛びました。ほんの短時間の出来事だつたように思いますが、これから図書館学を勉強し、いずれは図書館で働くようになるのではないかと、思っていた矢先、日本の図書館はアメリカ流の図書館学教育を受けた自分達を受け入れるような職場ではないのではないかと、とすっかり気が重くなって帰路についた思い出があります。敗戦から11年目、米軍の占領から解放されて4年目、〈もはや戦後ではない〉という言葉が流行りだしていたころで

すから、図書館界だけの特異な拒絶反応ではなかったかもしれません。

ともあれ、最近になって、あのとき、どんないきさつがあったのだろうか、確かめてみたくなりました。そこで、1956（昭和31）年当時の『図書館雑誌』を調べてみました。その特集号（『昭和31年度全国図書館大会議事録』）に全体会議の記録が載っていました。議題はたまたま「図書館専門職員講習会継続開催を文部省に要望する件」でした。暫定有資格者の資格取得のためにも、新人養成のためにも、文部省講習を続けて欲しいという説明がついています。

ここにいう暫定有資格者とは、図書館法が制定されたとき、長年図書館で働いてきた人がすぐ資格がなくなるのは忍びないという理由で、再教育期間が与えられた対象者なのです。これに対してギトラー先生は司書講習はあくまでも臨時的措置として開かれるものと了解しているという趣旨の前置きをして、次のように発言されました。

“今後、図書館学のコースがいろいろ出来てくると思いますが、それは大学基準協会において、図書館〔学教育〕<sup>2)</sup>の基準をもって設定した筈です。もしも講習会の措置がずっと続けられるとすれば、図書館学のコースがなおざりにされ、高い専門家が投げ捨てられると思います。私は慶應の学生を雇ってもらおうという意味で言っているのではないが、全体としての図書館学の水準が落ちることを恐れているのです。もしも、講習が行われるとすれば、短い期間だけだと思います。専門職員は医師や技術者が養成されるように、養成されて行かねばならないと考えております。”

不思議なことに、そこには野次があったという記録は見あたらず、代わりに（ ）つきで拍手と添えられてありました。拍手があったとしても、そのときは野次を聞いたショックで、私には聞こえなかったかもしれません。<sup>3)</sup>

これはほんの一例ですが、当時の図書館界に慶應の図書館学科に対する風当たり、新入りに対するヨソもの意識が働いていたことは確かです。このほか、例えば、慶應の連中はやたらに英語を使うキザな奴といった非難など、よく耳にしたものであります。〈レファレンス〉とか〈サーキュレーション〉などといわずに、〈参考事務〉とか、〈貸出〉といえ、といった類です。

気取っているというのではなく、なにしろ、それまでは教授陣の大半はアメリカからの訪問教授で、多くの場

合、通訳を介して授業が行われていた時代でした。大佐さんの『図書館学の展開』にも、“米人教授の講義はすべて英語であるから、学生は図書館学の他に語学の研修にも役立つ機会に恵まれている”と書かれています。また、日本語で書かれた図書館学関係の本が乏しく、教室で配布されるガリ版の資料と学科図書室の英語の本や雑誌を使わなければなりません。したがって、英語の図書館用語を使ったとしても、それは気どりでなくてもなく、ごく自然なことだったのです。

このような訪問教授による授業も、1956年の6月末にギトラー先生が退任されたのを最後に、全面的に日本人の教授陣に変わりました。いずれも若い先生ばかりでした。

ただ一人の例外は学科主任に就任された橋本先生でした。1951年1月橋本先生が文学部長のとき、ギトラー先生が慶應に訪問され、図書館学科設立の話が本決まりになったこと。また、同年4月文学部に図書館学科が開設された当時、橋本先生は慶應の常任理事として学務全般を担当されていたこと。そんないきさつから、小さく不安定な学科にもかかわらず、というよりは、そんな頼りなさがあったからこそ、あえて先生が学科主任を引き受けられたと伺っています。

橋本先生はもともと哲学科の先生であり、図書館学科の専門科目を習う機会がなかったので、学生は日頃、お会いする機会がなく、始業式とか終業式で挨拶をされるときにお目にかかる程度でした。したがって、学生のころは、橋本先生のどっしりした体軀の威圧的な風貌に恐れをなしていたというのが実感です。他の先生がたも、橋本先生の前ではかなり緊張されていたようです。

今、思いますに、仮に、橋本先生が学科主任を引き受けられなかったら、今日の図書館・情報学科が果たして存続しえたのだろうか、と考えさせられることがあります。哲学、史学、文学といった伝統的な学科からなる文学部に1学科として加わったものの、その設立目的からして、他学科に容易にとけ込めそうにない大変異質な学科でした。かといって、一人立ちもできそうにない大変ひ弱なとしかいいようのない学科でした。

橋本先生がそんな学科の主任をあえて引き受けられたことによる塾内の役職者に対する影響力は並々ならぬものがあつたと思います。また、対外的にも、種々の役職にあられた先生が学科の主任であったことが、社会一般に図書館学科を知らしめるうえで、効果は大きかったと思います。

私が慶應に勤めるようになって何年かたったころ、文学部の教員の会合で、話合う機会がありました。その際、図書館学科の状況について、ある長老教授から質問を受けたのですが、とっさにどう表現してよいか戸惑い、〈橋本先生という防波堤に守られて浮かんでいる小舟のようで…〉といったところ、その先生はくうまい表現だねと、お誉めとも皮肉ともつかぬ感想をもらされました。他の教授も、陰ではどうであれ、橋本先生の面前では平身低頭のていでした。したがって、いまでも、あのとき、あのように口走ったのは、実感そのものだったといえます。先生にはかなり強引なところがありましたから、当然反感を抱いていた人は少なくなかったのではないかと思います。

### カリキュラムの改訂

1956 (昭和 31) 年までは学科の科目名は直訳的な表現のものでした。しかも、これらの科目名を見ても、公共図書館の司書養成向きのカリキュラムであることは歴然としています。その大半は公共図書館の主要業務に対応した科目ないしはその基礎科目であります。例えば、「図書館・司書および社会」「社会教育と図書館」などを基礎科目とし、「児童及び青少年に対する図書館活動」「図書館館外活動・農山村に対するサービス」などが設けられていました。

1957 年に専任教員がすべて日本人に変わった機会に、従来の直訳的な学科の科目名が変更されました。例えば、「図書館・司書および社会」は「図書館学要論」となり、「調査及び書誌的資料と取扱法」は「参考資料・調査法」となりました。一見、大幅なカリキュラム改訂のように見受けられますが、学科要覧の英文の対訳科目名は以前のまま変更されていないところからも分かりますように、内容の変更はほとんどなされておられません。

訪問教授が担当していたころは、科目毎に毎時間の配分までを考えたシラバスが作られ、関連の配布資料とともに科目番号のついたフォルダーにきちんとファイルされていました。私が教員の仲間入りして分かったのですが、最初のうちは、それを参考にして教えていた人が多かったようです。

この学科の科目を補強するものとして、1957 年から 5 年間、毎年訪問教授を迎えたことが挙げられます。

初年度はエモリー大学のライル先生による「大学図書館」、第 2 年度はニューヨーク公共図書館のコリー先生による「公共図書館」、第 3 年度はイリノイ大学のロー

ラ先生による「学校図書館」、第 4 年度はウェスタン・リザーブ大学のフォーク先生による「専門図書館」が開講されています。いずれも各館種の図書館の管理運営を主とする内容の科目であります。最終年度はギトラー先生の再来日を企画したものであったので、やや異質の図書館学教育がテーマになっています。

いずれの年度も学科での講義だけでなく、学科の設立目的にそうように、現職者の再教育を目指して、各地での研究会が行われています。

後で分かったことですが、これら訪問教授として来日された先生、あるいは創草期の訪問教授の多くは、アメリカの図書館界ではいずれも著名な図書館人として知られている方々でした。したがって、その影響力も強かったといえます。アメリカの図書館関係者も慶應はよくあれだけの人材を集めたのだと感心しているほどです。

1962 年に、この西校舎が新築されました。そこで、学科創設以来およそ 10 年間親しんできた木造校舎に別れを告げ、この西校舎 2 階に移転し、学科専用の教室、図書室、視聴覚室、教員の研究室、事務室等を確保することができました。当時、まだ施設の整っていないかった慶應で一つの学科のために、こうした特別扱いともいべき優遇措置が講じられたのも橋本先生のおかげであったと思います。ここに学科は 20 年近くいたことになります。ちなみに、1981 年、図書館の新館落成を機に研究室は現在の研究棟に移り、図書室は図書館・情報学資料室として新館に吸収され、事務室は廃止されました。いい意味でも、悪い意味でも普通の学科になったのです。

西校舎に移った 1962 (昭和 37) 年度からカリキュラムの改訂が行われています。今回は科目名称の変更もさることながら、内容にわたるかなり大幅な改訂でした。それは、1950 年代後半あたりからのわが国のドキュメンテーションへの関心の高まりを反映したものであります。その大きな刺激となったのはドキュメンテーション活動を標榜して 1957 年に日本科学技術情報センターが創設され、活動を開始したことであります。

カリキュラム改訂において、特に、注目すべきは「社会教育と図書館」「図書館館外活動」など、いずれも公共図書館関連の主要科目が廃止されたことです。前回の改訂では「図書館・司書および社会」という科目から名目上変わっただけの「図書館学要論」も、今回は「図書館学概説」となって、その性格を一変させることになりました。

これと対照的に、「専門図書館」「専門図書館資料」「資料組織論特殊」など、専門図書館関連の諸科目が新設されました。公共図書館関連の諸科目を継続維持しながら、新しい科目を増設し、科目内容の拡充を図ることができたならばよかったです。スタッフの増員はせず、専任教員の人数が限られているところで軌道修正し、新しい領域に重点が移された結果、旧来の基本的領域ともいべき部分が消滅ないし弱体化の憂き目を見ることになったのは大変惜しまれます。

この改訂で特徴的なことは、一つは専門分化の傾向が現れた例として、「参考資料・調査法」のIを「資料情報調査」とし、IIを「人文科学資料」「社会科学資料」「科学技術資料」の三つに分割したことが挙げられます。

さらに、より特徴的なことは、「資料情報調査」という科目名からも分かるように、ドキュメンテーションとの関わりにおいて、情報志向傾向が高まりました。従来、図書館で収集、組織、保存、利用の対象としては、図書資料が念頭に置かれていましたが、これを〈情報〉ないし〈情報源〉としてとらえる傾向が強まって参りました。それは専門分野での情報への関心の高まりに呼応したものとはいえ、図書館現場とのギャップを一層深めるものであったといえます。

当時一般にはまだ、情報といえば、戦時中の恐ろしい体験から、しばしば思想統制に関わった「内閣情報局」とか、軍隊の諜報活動が連想され、何となくうさんくさいことばとみなされる傾向がありました。例えば、学科の卒業生の結婚披露宴に招かれたときのことを思い出します。今では、〈情報〉は何の抵抗もなく使われる日常語ですが、仲人が新婦の紹介で、図書館学科でさきほど例にあげました「資料情報調査」を学んだという話を聞きとがめた来賓の紳士から、スパイ紛いのことを教えているのではないかと、しつこく尋ねられたことがあります。

こうした過渡期に、図書館学科では3年間の生物科学図書館研究集会在が企画されました。その1年目の訪問教授はブロードマン先生でした。学科の講義とともに、夏に東京と大阪で研究集会在が行われました。

その大阪集会在の手伝いに行っていた我々数人が新大阪ホテルの薄暗いロビーで学会誌の創刊について話し合ったことを今でもよく覚えています。橋本先生から、教員は毎年必ず50枚以上の論文を書き、その雑誌に発表するようにという指示を受けてのことです。日本には図書館学関係の長文の論文を発表する機関誌がないから、そ

のような雑誌を作ればよい、というのが橋本先生の意見でした。先生の頭の中には、会長をされていた三田哲学会の雑誌がイメージされていたようです。

私には、研究の裏付けもないまま、毎年論文を書くという苦行がこの年から始まったように思われます。授業に追われる毎日で、ほとんど研究らしいこともしないで、締切期限がくると原稿用紙のマス目を埋める作業が始まりますから、よい論文が書けるはずはありません。今でも、かつて書かされたLibrary Science誌の論文は恥さらしの見本のようなものなので、目にしたくない心境です。

それに加えて、教員は各担当科目のテキストを書けという指令もありました。

この方は、未熟ながら、何とかノルマだけはこなしたのではないかと考えています。よく教員の責務として研究と教育とが挙げられ、研究に基づく教育ともいわれますが、蓄積もないまま、多くの科目を担当させられていた当時は、研究どころではない日課でした。一方で司書資格付与という条件もありますので、自分が十分知らなくても、一定範囲のことには触れなければならないこともありました。今でも、私の授業を受けた、かつての学生諸氏には申し訳ないことをしたと思っています。

## 学会の設立

1963(昭和38)年に本学会の前身、三田図書館学会が設立されました。学会ができて、機関誌が発行されたというのではなく、雑誌の準備が進み、その後に学会の設立が具体化したといった方が正しいと思います。それまで、三田図書館学会が存在していましたが、これは学会とは名のみであって、卒業生の親睦団体といったものでした。そこで、教員と卒業生有志との話し合いをして、学会名を譲ってもらって正規の学会として発足することになったわけです。

生物科学図書館研究集会的の第2回は学会の機関誌Library Scienceが創刊されたこの年で、訪問教授はコロンビア大学のフレミング先生、翌年の第3回はカリフォルニア大学デービス校のブランチャード先生でした。それぞれ東京と大阪、東京と京都で開催されました。いずれもドキュメンテーションに傾斜した研究集会在であったといってよいでしょう。

また、この年をもって、3年にわたる現職者を主な対象とする生物科学図書館員特別養成プロジェクトが終わり、その間、51名が修了しています。

その後、学部課程は一応軌道に乗り、年々充実して参りました。60年代後半は日吉から図書館学科に進学する学生の希望者が増え、第一志望の学生に英語のテストと面接を課するかたちで選抜をしても毎年定員オーバーの70人前後の盛況でした。

こうした状況を踏まえ、大学院課程の新設準備が進められました。それが、ようやく実現したのは1967年のことです。この年、「情報に関する研究水準を高め、基礎的研究能力を付与し、高度の専門的職能を開発することを目的として」文学研究科に図書館・情報学専攻の修士課程が開設される運びとなりました。修士課程の設置を契機にして、徐々に研究志向が高まってきたといえるでしょう。

翌1968年には修士課程に合わせるために、学部のカリキュラムを改訂するとともに、学科の名称が〈図書館・情報学科〉と改められました。必修科目の主な変更は「資料情報調査」が「参考調査資料」と「参考調査法」に二分され、「資料組織論」I, IIは「資料組織法」I, II, IIIとなり、選択科目の「資料組織論特殊」は「情報検索論」という必修科目に改められました。

また、システム思考ばかりに呼应したかのように、「図書館経営論」は「情報システム論」となり、「大学図書館」「公共図書館」「専門図書館」「学校図書館」など、各館種の図書館関係科目は「図書館・情報システム管理」と呼ばれることになりました。

以上の科目名の変更経緯を見ますと、明らかに学科のカリキュラムは公共図書館主体の図書館実務教育から、次第にドキュメンテーションないしはインフォメーション・サイエンスへの傾斜を強めていったといえます。しかし、同時に、カリキュラム改訂に際しては、文科系である文学部の一学科という制約も考慮しなければなりません。したがって、他学科他専攻の科目構成と共通のパターンをとるよう配慮されました。

同じく、この1968年に、三田図書館学会も〈三田図書館・情報学会〉と学会名を変更し、学会誌のLibrary ScienceをLibrary and Information Scienceと改めることになりました。

以上のルールを敷いて、翌69年3月、橋本先生は定年により退職されました。1956年から13年と数か月、学科主任として指導力を発揮され、今日の図書館・情報学の基礎を築かれたとともに、この学会の創設、発展に多大の力添えをなさいました。最初のころの挨拶では、〈図書館については門外漢ですが…〉と決まり文句

のようにいつて居られましたが、後には、専門用語が頻発する講演を堂々とやってのけられていました。同時に、すっかり温顔の先生になられ、私のような若輩にも図書館について様々な意見を求められたものです。図書館・情報学専攻の博士課程が開設されたのは先生ご退職後のことですが、修士課程の次は博士課程といった方向性は当然見通しておられたはずで

す。このころになると、橋本先生が去られても、もはや学科の存亡が問題になるような脆弱な組織ではなくなっていました。多くの卒業生を輩出し、学内的にも対外的にも一定の評価を勝ち得るまでになっていました。そこで、1971(昭和46)年に学科創設20周年を迎えたのを契機として、学科の教員からなるカリキュラム委員会が設けられました。従来、およそ5年毎にカリキュラムの見直しをしてきましたが、今回は長期的展望にたつて抜本的改訂を試みることになりました。もちろん、抜本的とはいっても、文学部の一学科ですから、今回もその学則の許す範囲内でのことです。

図書館に関わる技術面の進展が急激であるために、それに即応するには、できるだけ弾力性を持たせるよう配慮することが基本方針とされました。

しかし、カリキュラムを考える場合、より重要なことは、その内容が何かを確定する必要があります。

学部課程は図書館・情報学科、大学院は図書館・情報学専攻ですから、当然〈図書館情報学とは何か〉が問われなければなりません。それに関わって、図書館学あるいは情報科学は何かを確定する必要があります。

図書館学は図書館現象を客観的に分析することによって、科学的基礎を探究することを目指しているといえます。その教育の主要目的は図書館における記録情報を収集・組織・保管し、適切な提供を図るために必要な知識・技術を教授することにあります。

図書館学が成立するためには、固有の対象概念としての図書館現象を明らかにし、方法的基礎づけをしなければなりません。それは実証的な研究を通じて確立されるべきものであります。それまで、図書館学においては、理論と実践との交互作用がほとんど考慮されていませんでした。

そこで、たまたま新しく注目を浴びていたインフォメーション・サイエンスをよりどころとして図書館学的方法的基礎づけを行えば、重要な示唆が得られるのではないかと考えられました。もっとも、インフォメーション・サイエンスといってもさまざまな立場から、多様な

解釈がなされていました。その訳語も〈情報学〉であったり、〈情報科学〉であったりします。しかし、私どもは、1965年に日本学術会議が「情報科学の研究機関の設立について」勧告した文中で説明している定義を選びました。すなわち、“機械、生物体および人間社会における情報の作成、伝達、改造、蓄積、利用についての一般原理に関する科学”としての情報学をよりどころにしました。

情報科学がこのような一般原理を明らかにする科学であるならば、記録情報の利用現象の研究に焦点をおく図書館学は情報科学の科学的土台の上に築くことができる応用科学であると考えられます。つまり、図書館学は情報の伝達・利用のための科学・技術を支える情報科学の成果から、その理論的基盤を求めることができると期待したわけです。したがって、図書館・情報学の研究・教育を体系化するために、情報科学の体系と構造に基づいてカリキュラム計画を進めることができると考えました。

そこで、教育内容を構造化するために、図書館・情報学の各領域の基本的要素を抽出し、整理することにしました。

その結果、資料系列、組織系列、探索系列およびシステム系列の4系列を設け、さらにこれらの系列間を貫き、調整する科目群を基礎科目群として配することにしました。詳しくはLibrary and Information Scienceの拙稿「図書館・情報学の教育」ならびに図書館・情報学科カリキュラム委員会の2回にわたる報告を参照していただきたいと思います。<sup>4)</sup>

こうして、1972年から学部、大学院ともに新しいカリキュラムすなわち図書館・情報学のカリキュラムに急旋回していったということが出来ます。これがその後どのように修正され、展開されていったかの経緯については、1973年に私は退職し専任から離れましたので、責任を持って申し上げられませんが、ここでは言及しないことにします。

### おわりに

以上、学科設立20周年ごろまで、と同時に学会創立およそ10年目までの時期を回顧しましたが、最初に申しましたように、〈日本の図書館学は慶應の図書館学科の歩みとともに発展した〉といえるのでしょうか。この点について簡単に所感を述べて、つたない講演の締めくくりとさせていただきます。

まず、教育すなわち図書館員養成の面では、所期の目的を達成することができたのではないかと思います。多くの優秀な卒業生が図書館現場で活躍し、図書館界において主要なポストを得て、指導的地位を占めるにいたりました。将来性のある現職者を研修生として迎え、さらに毎年のように全国的規模の研究集会も行ないました。

他方、研究面ではどうでしょうか。大学院課程ができてから間がないこともあって、私がいた当時は教育面ほどには成果をあげていなかったといつてよいと思います。幸い、その後1975年に文学研究科に図書館・情報学専攻の博士課程が開設されたことにより、研究機運が盛り上がり、ようやく研究志向が高まってきました。私が専任でいたころまでの学会誌をみても、研究業績と呼ぶにふさわしい論文は数少なかったといつてよいでしょう。したがって、学会誌とはいっても、学科紀要の性格を色濃くとどめていました。それから見れば、今日の学会誌には多くの研究論文らしい論文が収載されるようになり、完全に紀要的性格のものから脱却しきっていないとはいえ、格段の充実ぶりは大いに評価できると思います。

しかし、確かに、慶應では図書館学科、さらに図書館・情報学科が根づいて、成長しましたが、すでに述べましたように、全国的にみて、日本の図書館学が発展したかどうかとなると、いささか疑問なしとしないところであります。慶應の学科、学会としては成長したものの、その波及効果をあげるほどの影響力を発揮するまでには至らなかったという感じがします。もちろん、それは学科、学会だけの責任でないことはいうまでもありません。

ギトラー先生が、学科主任を辞して帰国される年の全国図書館大会で、司書講習はあくまでも臨時的措置と考えたと発言されましたが、依然として司書講習は開催されています。多くの大学で図書館学が開講されているとはいっても、それらの大半は司書講習相当科目を開講し、司書資格授与を目的にしています。〈今後、図書館学のコースがいろいろ出来てくると思います〉といわれたギトラー先生の念頭にあったのは、現在多くの大学、短大で見られるような、司書講習規程の科目や単位数の見直しに浮き足だっているようなコースではないはずです。

1979年に専門の単科大学として図書館情報大学が新設され、1985年には愛知淑徳大学が専門の学科を設け、その後大学院を設置した例とか、その他いくつかの専攻



課程を持った大学がありますが、国際的にみて、近隣の諸外国と較べても、大学における正規の図書館情報学の発展は著しく低調といわざるをえません。

そうした中で、改めて、かつての大佐さんの『図書館学の展開』と同じ構想のもとに、『図書館・情報学の展開』という本をまとめたとしたら、「日本の図書館・情報学」の章はどのように書かれるのでしょうか。“日本の図書館・情報学は慶應義塾の図書館・情報学科の歩みとともに発展してきた…”と書けるでしょうか。やはり“図書館情報大学の歩みとともに、”と書かれるのでしょうか。興味あることではあります。

しかし、その次元の問題は些細なことではないかと思えます。より大局的に見て、現在、図書館情報学を標榜する研究機関が十指に満たないことこそ問題です。したがって、他の国々を扱っている各章に較べて、「日本の図書館情報学」の章がいかにも貧弱ではないかと想像できます。

そういう意味で、慶應も図書館情報大学もともに、図書館情報学の研究センターとしてリーダーシップをとる役割があるのではないのでしょうか。お世辞ではなく、現在、慶應の図書館・情報学科の教授陣はこれまでになく充実しているといえますが、学内での充実にとどまら

ず、この学会創立 30 周年を契機に、学会誌から学科紀要の性格を払拭し、学会が三田という文字を冠していたとしても、それにこだわることなく全国的な学会に、さらには国際的な学会に発展するよう協力して守り立てていかれるよう期待しています。

- 1) 糸賀雅児助教授は卒業論文（東京大学教育学部に提出）において、当時の図書館学論争をとりあげ、これをハシカのような現象と評しているが、まさに至言といえよう。
- 2) 大学基準協会の「図書館学基準」は図書館学科における教育を対象とするもので昭和 29 年 4 月 27 日決定。他に「図書館員養成課程基準」（昭和 25 年 4 月 25 日改訂）もある。
- 3) この講演終了後、中村初雄名誉教授（当時、図書館学科助教授）から感想が寄せられ、当時、慶應の図書館学科に対する図書館界の反発にはかなり厳しいものがあり、ご自身も当日の野次のことはよく覚えているとのことであった。
- 4) 長澤雅男。図書館・情報学の教育。Library and information science, no. 10, p. 1-12 (1972) および図書館・情報学科カリキュラム委員会。慶應義塾大学図書館・情報学科のカリキュラムの現状。Library and information science, no. 11-12 (1973, 74).